Meteorological Society of Japan

間を大切にし，また部下との和を大切にする先生の印象が強かったからである．

先生のご冥福を心から祈りします．

和達清夫先生を偲ぶ

廣 野 卓 蔵

和達清夫先生は本年1月5日に92歳で突然逝去されました．普段先生を目標に励んで来た私は急に目標を失い一時は茫然としました．

昭和10年に私が大学を出て中央気象台に採用され，和達先生の第2地震掛に配置されてから丁度60年経ちました．その間，先生の方は止まる処を知らず，あれよあれよと言う間に高い地位に就かれました．従って私が先生と御一緒できたのはせいぜい5年間位のものでした．しかし，和達先生はその後も地震研究への情熱を絶やすことなく，時折お会いするとその話しになり，私は先生の御意向に沿って地震の研究を進めるようになりました．他方，私も先生と同様，結核の恢復者ですから，先生が会長をしておられた恢復者の複十字会で定期的に先生にお目にかかって来ました．要するに，先生と私は鉄路に沿って走る小路のように何処まで行っても鉄路とは付かず離れずの関係でありました．先生は亡くなられたが，これからも先生の思想を推進して行く覚悟であります．

先生のお生まれは1902年で，亡くなられたのが1995年ですから，先生は正に20世紀を一気に馳け抜けて行かれました．その間，先生の行動には全く無駄がなく，万事に決断は迅速でした．大正14年23歳で中央気象台に入られ，始めに地震学を専攻されて深発地震を発見され，恩賜賞を受賞されたのが昭和7年30歳でした．昭和11年から管理職に移行され，中央気象台長になられたのが昭和22年45歳，退官されて防災センター所長になられたのが昭和38年61歳，埼玉大学長が昭和41年64歳，学士院長が昭和49年72歳，文化勲章受章は昭和60年83歳でした．60歳以後は27に及ぶいろいろの審議会，委員会，顧問，理事会等の要職をこなされました．

先生初の幸運は，先生が中央気象台に入られたとき，関東大地震を契機に気象官署に設置されたばかりのウィーヘルト地震計による新鮮な資料を自由に料理することができた事でした．かくて和達先生が世界に名を馳せた地震の研究は先生が24歳から34歳まで10年間のお仕事でした．このときの栄光は生涯先生から消えることはありませんでした．ここに掲げた写真（写真9）は1962年に先生が世界的に有名な地震学者達と写されたものです．

先生の次の転機は地盤沈下の研究でした．昭和11年に先生は大阪支台長に転出され，災害科学研究所第1部長を兼務されました．当時大阪でも，東京と同じく地盤沈下現象が激しく，低地に出水などがあって，その対策が急がれていました．そしてその原因としてさまざまな説が唱えられていましたが，決定的なものがありませんでした．先生は災研の仕事の一環としてこれを始め，4年の歳月をかけて，地下水過剰汲上げ説を確立しました．

この時のお仕事に私も大いにお手伝いをしましたが，先生と御一緒に研究らしい研究をしましたのはこれが最初で最後でした．私はこれで先生の信頼を得て，その後何度か先生の論文の下書きをしたことがあります．勿論先生が納得したものだけがパスしました．

和達先生の地盤沈下問題のとらえ方は，単なる一研究問題の解決に止まらず，更に同じ問題に悩む多くの地方を救うことでした．実際に新潟地方などは天然ガス汲上げ規制によって問題を解決しました．この際先生にとって大事なことは人を説得する前にまず御自分が確信を持つことで，そのためにわざわざ私の提出した沈下説を追試して確かめたものと思われます．

この先生の“確信”は結核患者救済運動にも現われています．先生は中央気象台に入られて間もなく肺結核に罹られました．その時分は不治の病として恐れられた病を2年余で克服され，その時の御経験から結核は必ず直るという信念を持たれ，同病者を励まし，「あくまで希望あれ」等の名著を以て導きました．そして複十字会の会長を最後まで勤められました．己れ一人の成功に止まらず，万人と幸を共有しようとする先生の精神は誠に尊いものがあります．先生のお話を聞いていた複十字会員の一人は「先生のおっしゃることは

NII-Electronic Library Service

Meteorological Society of Japan

キリスト教の愛の精神と同じだ」と感激していました．

先生は関東大地震に遭遇し防災を志して中央気象台に入られたが，地盤沈下で自然災害よりも広い意味を持つ人為的災害，すなわち公害の一端に触れられ，大気汚染，水質汚濁等へと公害全般に視野を広げられ，その後長らく中央公害対策審議会会長を勤められました．先生の公害問題解決への究極の精神は自然を愛することであり，更に進んで，我々が自然から愛されているという信念であります．先生最後のお言葉は「自然は愛なり」でした．先生のこの高邁な精神が先生を社会的にもこれほどまで高く押し上げた原動力となったと考えられます．先生の御冥福を心からお祈り致します．

驥尾に付して五十年

福　井　英一郎

われわれ地球科学部門に属する学徒の一人として日頃敬愛限りなかった和達大先達の突如としての急逝は全くの寝耳に水であった．ご逝去後7旬を越えた今，在りし日の思い出の中からその一部を取り出して故人を偲ぶよすがともしたい．筆者より3年前にこの世に生を受けられ，大学も又年齢と平行して3年前の大先輩であるが卒業と同時に当時の中央気象台に入台，地震掛に就任された．筆者が大学2年生の頃に日本気象学会に入会手続きのため当時の規約として入会には部内の紹介者が必要であったので測候技術官養成所の講師を兼任されていた辻村太郎先生から地震掛主任の国富信一技師に連絡していただき，その頃まだ竹平町に関東大震災の直後に出来たバラック建ての庁舎の玄関を入った左側の地震掛に出向いて所用を果たしたが，この時和達先輩は同室で机を並べておられ，直接お話はしなかったものの近くで「明日の日曜に地震が起こらないと良いがなあ」と囁かれたのを耳にしたような気がする．兎に角初めてそのお名前を知って以来今日まで70年，専攻科目を異にしていたので直接の接触は少なかったものの陰に陽に間接的ながら学風その他に少なからぬ影響を受けたことは否定出来ない．故人はその2年後だったか病を得られ暫く病床の人となられて一旦休職されたもののその後闘病に努められた結果，見事に重病を克服快癒され，自来別人の如く終始精力的な活動を続けて今日に至り深発地震の研究で学士院恩賜賞を受けられ，第6代中央気象台長，初代気象庁長官を経て退官後も埼玉大学長，日本学士院長など多くの要職を歴任された．学問的にも専門の地震学に止まらず，非常に幅が広く多才であり気象学の問題についても多くの論文を出され，大阪管区気象台長時代には付設の災害科学研究所に多大の関心を向けて指導された．今日では定説化している地下水の汲み上げによる地盤沈下の問題など専門の深発地震などとは別個に創意に富んだ卓見と言ってよいであろう．その後も中央公害対策審議会長や日本環境協会会長として多数の世論を纏められるなど環境問題にも大きな貢献をされた．

大学卒業後東京文理科大学にいた筆者はずっと後れて昭和17年に藤原台長の時代に入台し荒川秀俊課長の下に調査課に配属され，主として大東亜諸地域の気候誌の作成に従事していた．在職2年目に北京の国立華北観象台に転出したが，和達先輩も確かその翌年大阪管区気象台長から満州国中央観象台長として赴任されたが前記の華北観象台と直接の関係があった訳ではない．昭和19年に満鉄の委嘱を受けて満州国に出張中当時新京（今の瀋陽）にあった中央観象台に表敬訪問をして和達台長から種々事業運営上の有益なご教示に預かった．

少し私事にわたる余談になるが国立華北観象台は古くから市内にあった中国北京観象台とは別個に戦時中新しく政権として成立した華北政務委員会によって設立されたものであり，ほぼ同数の日本人と華人の職員により成り，華人の台長と日本人の副台長がその統率に当たっていた．当時の台長の文元模氏は若くして日本に遊学し，東京大学物理学科を出られ北京大学理学院長を兼任されていた．このような重職に多士済々の先輩や同僚をさしおいて弱冠未熟の私に何故白羽の矢が立ったのであろうか．これには大きな理由があり，戦時中は厳重な気象管制が布かれ，特に戦地の天気に関する情報は高度の秘密事項で現地には方々に陸軍の

NII-Electronic Library Service